

ポール・クロードル大使と中禅寺別荘

——日光中禅寺の発展と外交団別荘——

井戸桂子

Ambassador Paul Claudel and His Residence in Chuzenji

Keiko IDO

Abstract

The area of Lake Chuzenji began to be visited by foreign visitors, especially by diplomats in the late 1890's.

Embassies of several European countries set up summer residences there; the French Embassy did so in 1909. Since that time, a Japanese traditional house, formerly owned by Shuzo Aoki, diplomat and Minister of Foreign Affairs, which still stands near the shore, has been the residence of visiting French diplomats and their families.

Paul Claudel, who was Ambassador to Japan from 1921 to 1927, loved this wooden house and enjoyed the view of the lake side surrounded by the mountains. He even wrote to his friend in France, “l'on est entièrement mêlangé à la forêt, au ciel, à la nature” or “one is totally blended with the forest, with the sky, with all nature”.

It was in this residence that Paul Claudel, escaping from the public life of an ambassador, wrote many literary works, such as *Le Soulier de Satin*, and he was greatly moved by the natural beauty of the Chuzenji area, including the azaleas in May, the trees aflame with red and yellow leaves in October and the crystallized cascade of Urami Falls in the cold winters. His stay in the residence provided him with an opportunity to relax and to be literarily productive. He realized the importance of the villa to his private life as an artist, so that when he acquired a chateau in Brangues, near the River Rhône in France in May of 1927, just three months after his leaving Japan, he perhaps fondly remembered Chuzenji and Japan.

はじめに ～1898年と1921年～

- 1 日光と外国人訪問客
- 2 中禅寺湖畔と外国人避暑客
- 3 外国人の別荘
- 4 フランス大使館中禅寺別荘の由来
- 5 クロードルと中禅寺別荘

6 クローデルの別荘滞在 ～Cahier から～

7 クローデルにとっての日光 ～「別荘」のちの「城館」の意味～

おわりに ～『百扇帖』より～

注

はじめに ～1898年と1921年～

詩人大使といわれるポール・クローデル (Paul Claudel, 1868-1955) にとって、日光・中禅寺は、生涯を通してみても特別な地であった。何が彼を惹き付けたのであろうか。

クローデルは、二度日本を訪れた。初回は明治31 (1898) 年の6月、副領事として中国に勤務していた際にその休暇を利用して、3週間かけて日本を巡った。次は大正10 (1921) 年11月から昭和2 (1927) 年2月まで、途中一年間の一時帰国を除けば、四年にわたり駐日フランス大使として日仏交流に寄与した。

二度の滞日中、詩人として、また劇作家さらに評論家として、クローデルは重要な作品を残している。たとえば、若き日の詩人は日本で数篇の詩を書き、散文詩集『東方の認識』 (*Connaissance de l'Est*, 1900) にまとめた。円熟期の劇作家は、代表作『繻子の靴』 (*Le Soulier de Satin*, 1928) の一部原稿を、大正12年の関東大震災により焼失したのち、再び書き直した。日本を理解しようと努める大使は、『朝日の中の黒い鳥』 (*L'Oiseau noir dans le Soleil levant*, 1927) に日本の文化と日本人の心についての貴重なエッセイをまとめた。

そして二回のどちらの機会でも、彼の創作者としての仕事に大きな影響を与えたのが、日光であった。この土地の自然であり、東照宮であり、中禅寺湖畔の別荘であった。

初回の明治31 (1898) 年の旅行では、拙論「ポール・クローデルの日光—若き詩人への啓示—」^{註1)} で論じたように、来日した30歳目の

クローデルは、まず日光に直行する。東照宮を訪れ、「森の中の黄金の櫃」 (散文詩 *L'Arche d'or dans la forêt*) に死者が神に変身する舞台を見る。翌日、日光山中を毘沙門天のような杖を持って歩き中禅寺湖を目指したものの、雨のため断念するが、「散策者」 (散文詩 *Le Promeneur*) は詩人としての自信を授かる。

次の大正10 (1921) 年11月からの大使時代には、前回引き返した中禅寺坂の上の湖畔にフランス大使館別荘が整えられていたおかげで、彼は滞日中頻繁に日光中禅寺を訪れ、かけがえのない時間を過ごすことが出来た。金谷ホテルに宿泊するのは、本国からの賓客とともに滞するときだけであり、その時以外は、別荘に住んだ。

では、この別荘のある中禅寺とはどのようなところなのであろうか。なぜクローデルは愛着を覚えたのであろうか。本稿では、クローデルと日光について、特に中禅寺別荘の意味について考察したい。

まず背景として、クローデルの訪問した明治31 (1898) 年と大正10 (1921) 年の二十余年の間に、日光という地に起きた変化を検討する。次に外国人の別荘、ことにフランス大使館の中禅寺別荘の由来について明らかにしたい。そして実際に彼の日記を根拠に、いつどのように滞在したかを詳らかにし、創作家クローデルにとって、愛着をもった別荘がどのような意味をもったかを考察する。彼の滞日中の作品群や日本観についての考察は別の機会に譲り、本稿では奥日光及び中禅寺別荘という環境とクローデル

とを重ねて考察したい。

尚、中禅寺湖近辺の正式名称は二荒山神社中宮祠に由来する「中宮祠」であるが、本稿ではクローデルも Chuzenji と書いているので、通称の中禅寺と記す。

1. 日光と外国人訪問客

明治時代、なぜ日光は外国人の訪問を頻繁に受けるようになったのであろうか。また、クローデルの二度の訪問は、日光の変遷においてどのような時期であったのか。

明治の初めに神仏分離が行われていく中、日光という小さな町は、徳川幕府の庇護を受けていた江戸時代とは正反対に、まさに徳川の遺産、東照宮がある故の逆境の時代に直面していた。賑わいを取り戻したのは、外国人の来晃（日光訪問）をきっかけにしてから、と言っても過言ではない。

国際交流の地となる日光にとって最初の幸運は、明治3（1870）年の春、英国公使パークス夫妻一行が輪王寺に宿泊し、東照宮を訪問したことである。しかもその一行には、若き書記官アーネスト・サトウが含まれ、彼はのちに中禅寺湖畔に別荘を所有するほど日光を気に入った。

次の幸運は、明治7（1874）年に外国人のための「内地旅行規則」が制定され、「外国人旅行免状」を取得した外国人が休暇に赴くのを許された数少ない地区の一つに、熱海、箱根と並んで、日光が指定されたことである。この指定には、外交官たちの後押しが想像される。というのは、先のサトウがこの規則の施行される明治8（1875）年に、外国人向けに日光の案内書 *A Guide-book to Nikko* を出版するという素早い対応をしているからである。さらにサトウは、同年秋に奥日光に関する小冊子を発行するほか、明治14（1881）年には共著で *A Handbook for Travellers in Northern and Central Japan* と

いう本格的な案内書『日本旅行案内』を出版し、もちろん日光も掲載した。この書はその後版を重ね、そのたびに最新情報を載せて改訂され、旅行者必携の書となる。案内書が整うと旅行者は心強い。

こうして、許可証と案内書をもった外国人が用意万端となれば、次に必要となるのは、迎える側の宿泊施設の用意と交通の整備である。

宿泊施設は、当初は輪王寺の僧坊や、村長で東照宮の雅楽も務める金谷の家が提供されていたが、明治4（1871）年に、旅館スタイルではあったが鈴木ホテルが外国人客を受け入れ、金谷家もカッテージ・インとして営業を開始した。同時に交通手段も整備されていく。早くも明治5年（18872年）に千住一宇都宮間で鉄道馬車が通い、明治18（1885）年に待望の鉄道が上野一宇都宮間に開通した。鉄道が開通したとなると、避暑に訪れる外国人は増加する。しかも、明治19（1886）年は関西からコレラが流行し、東京にも及ぶ。避暑だけでなくコレラから逃れるために、日光を訪れるのである。明治20（1887）年には来晃の外国人は1200名を超えた。そのような外国人のために、至急の連絡に必要な電信所が、明治19（1886）年にまず夏季の3カ月ではあるが整備された。

その上、明治23（1890）年には鉄道が日光まで延長された。もう夏の暑いとき、宇都宮から一日かけて人力車に揺られることなく、来晃出来るのである。当然、訪問者は増える。すると、宿泊施設はさらに必要になり、明治21（1888）年に日光ホテル、明治25（1892）年に新井ホテルが開業し、明治26（1893）年には現在の地に日光金谷ホテルがオープンした。日光金谷ホテルは、明治30（1897）年、帝国ホテル、箱根富士屋ホテル、都ホテル、大阪ホテルとともに、「5大ホテル同盟会」を結成し、外国人対象の日本を代表するホテルとしての気概をもっていた。

このように、鉄道とホテルとの開業が相乗効果を生んで、日光は賑わっていく。この明治20年代、外国人の来訪数は急上昇し、明治25(1892)年には2000人を超え、明治30(1897)年には5400人となった。たった五年間で倍以上の増加である。^{注2)}

さらに、外国人向けのホテル建築だけでなく、新しい動きも起こった。それは、皇室と日本の要人の滞在である。東照宮山内の御殿地に東照宮の社務所が移転改築され、「朝陽館」と称して貴賓の接遇に充てられていたが、明治26(1893)年宮内省に献納された。ことに皇太子(のちの大正天皇)が日光を好まれ、朝陽館への行幸は明治29(1896)年から計11回を数える。また、皇太子ご静養のために、山内に続く日光田母沢(たもさわ)御用邸が明治33(1900)年に竣工された。尚、この御用邸は大正天皇即位に伴い大正10(1921)年のころまで増改築が続けられ、皇室最大級の御用邸となった。ところで皇室の御用邸があるということは、外国人だけでなく、日本の政府高官も来見する。また明治中頃になると、夏休みを取るという習慣が、西洋化の影響で上流階級あるいは官庁や教育関係者に浸透し始めた。日本の指導者階層や大学関係者は夏休みをとり、避暑に来見するようになった。邦人来見者は、年によって差はあるが、明治20年代後半、七万人から十万人へと増加した。明治30年の頃、外国人と日本人の避暑客で、日光はごった返すようになっていた。^{注3)}

中国に赴任していた30歳目前のクローデルが日光を訪れたのは、明治31(1898)年である。皇太子も来見され、日光駅から東照宮山内近辺まで、まさに内外の客で賑わっていた時代である。たとえ日本滞在3週間の短さでも日光を訪問するのが、外国人観光客の定石であった。クローデルも、長崎から海路横浜に直行し、上陸した後も横浜や東京は素通りして、上野・宇都

宮・日光駅を経て、東照宮真下の日光金谷ホテルに投宿した。そして東照宮を訪れ、家康の奥の院を「森の中の黄金の櫃」と見立てた。ここまでは、納得できる行動である。

しかし、このフランス人旅行者は日光のいわゆる二社一寺(東照宮・二荒山神社・輪王寺)だけで満足していない。もっと奥の、山道を登って中禅寺湖へ行こうとする。しかも六月という時節柄、梅雨前線が停滞したのであろう、相当の雨降りの日であったにも拘らず、中禅寺湖を目指す。ずぶぬれになりながら、一人山道を進み、途中で村の女性に変な外人だと思われても行こうとしたのだが、夕刻になり断念して帰ったという。この行動をどう見るとよいであろうか。

クローデル自身は来日してわずか三日目の一旅行者である。彼自身がこの日光近辺に関して、特別の情報収集を任地の中国でしていたとは考えられない。ということは、この日光金谷ホテルに投宿した折に、あるいはガイドブックに於いて、「日光の山内、二社一寺のほかに、奥の日光、中禅寺湖が、訪れるべき地である」という話が出ていたと考えられる。中禅寺湖の評判を、次にたどりた。

2. 中禅寺湖畔と外国人避暑客

クローデルが最初に来見した明治30年代初めは、ちょうど避暑に来る外国人たちが、居所を日光山内から、中禅寺湖の方へ移動していく時期であった。世界漫遊旅行の観光客としてなら、日光の駅近くのホテルに数日投宿し、また次の観光地へ向かうことで満足するであろう。しかし、そもそも避暑地として逗留するために来見する東京在住の外国人たち、たとえば在日外交官たちは、明治20年代後半の日光山内の混雑に耐えられなくなっていた。最初に日光を選んだ彼らは、次に、さらに奥にある中禅寺湖畔を選

ぶ。静かで湖があり、イギリスの湖沼地域をほうふつとさせる風景といわれる、奥日光に憧れる。とはいえ、難関は二つあった。険しい中禪寺坂の登攀と、湖畔の設備の貧弱さである。

この難問も、いずれは解決される。まず宿泊施設について検討したい。

江戸時代、中禪寺湖畔には男体山への修験者のために、夏季に六軒の茶屋がささやかに店を開いていた。聖地に通年の住民が住み始めたのは明治10年ごろ、六軒の茶屋が旅館として営みを始めてからである。^{#4)}そして前述のサトウが奥日光を紹介し、初めは少数ではあるが在日の外国人が、駕籠や馬に乗って中禪寺湖に辿りつく。^{#5)}ことに明治26(1893)年『日本旅行案内』第3版に釣りの楽しみが掲載されてからは、外国人客も徐々に増え、明治27(1894)年西洋式ホテルのオープンを迎える。それが、日光金谷ホテル支配人でアメリカ帰りの坂巻正太郎が手がけた、文字通り中禪寺湖畔を望む、レーキサイトホテル(現在も日光レークサイドホテルとして営業)である。Lakeを「レーキ」と称するところにハイカラな明治らしさを感じられるが、このホテルはこれから太平洋戦争までの四十年にわたり、華やかな社交場となる。そして本当に中禪寺が気に入った在日外国人は、日本人から借家をする。あるいは日本人の名を借りて別荘を建てる。お雇い外国人のイギリス法律家カーウッドが明治20(1887)年に建てたものが、その最初と言われる。その他の湖畔の設備としては、明治40(1907)年ころまでに、交番、郵便局、電信所、人力車、パン屋、西洋洗濯屋、床屋、酒屋が整っていく。

次に交通について辿りたい。明治20年代後半から、本格的な避暑を好む在日外国人は、関心を中禪寺へと向けて坂を登っていく。その坂道はどのようなものであったのであろうか。

日光の町中から「馬返し」までは、比較的楽

な坂道であるが、このあと湖畔までの中禪寺坂が、文字通り馬を返さねばならないほどの難所続きである。そこでまず明治20年代の前半に、馬返しの先に、つづら折り(幾重にも曲がりくねった坂路)によって勾配を少なくした新道が索道された。現在のいろは坂の原型であるが、この名がついたのは昭和10年代のことである。この新道は人力車も通れる道幅であった。これで旅行客は駕籠でなく人力車で登ることが出来るし、物資も運べるようになった。明治27(1894)年のレーキサイトホテルのオープンも、この新道が出来たおかげである。つづら折りの新道は確かに画期的ではあるが、しかしまだ時間と経費はかかる。下の日光山内の神橋から湖畔まで、片道、駕籠で4時間半、人力車で3時間半を要するのである。

そこで次の手として考えられたのが、日光駅から馬返しまでの「日光電気軌道」敷設事業である。地元の発議により、明治43(1910)年8月に馬返しの手前2キロの岩鼻まで、大正2(1913)年10月に馬返しまで開通した。牛馬糞もなく衛生的に、40名乗りの客車と4トン積みの貨車が馬返しまで走り、奥日光への旅は少なくとも前半は快適になった。

残るは、馬返しの先のつづら折りの坂道を、自動車も通れる道幅に拡張することである。大正3(1914)年、東照宮の調査依頼を受けた本多静六は、「日光山水利用策」という講演を行い調査書としてまとめる。ここでの計画は、山内の日光廟から奥日光の中禪寺湖・菖蒲が浜・湯元まで、自動車を利用することを中心としたもので、画期的な意見書であった。具体的な会社営業計画も示し、10人乗りの自動車を12台買い、神橋―湯元往復を、人力車では2日、6円かかるのを、自動車では3時間、3円と見込む。そのためにも、まず道路が必要である。

この念願の事業が遂行されたのは、大正

14 (1925) 年のことである。金谷ホテル社長金谷眞一は、大正5 (1916) 年に日光自動車株式会社を設立し、同ホテルも発売間もない「モデルTフォード」車を購入し、賓客を接遇していた。大正11 (1922) 年にイギリス皇太子の来晃の際のお立ち寄りもあり、金谷眞一はお客を案内するにあたり、中禅寺への車道の必要性を強く感じた。同社から県に対し改良工事への寄付があり、大正14 (1925) 年、新道は、乗合自動車も通ることの出来る道幅に拡張された。ちなみに昭和2 (1927) 年には、同社から今度は湖畔一湯元間の道路改良費に対する寄付があり、湯元まで車の通行が可能となった。^{#6)}ここに、先の本多静六の提言が実現された。ようやく人々が、ことに車を利用する外国人や日本の要人たちが、奥日光を快適に楽しめるようになった。

このように、施設と交通が整い、外国人をはじめ避暑客たちが中禅寺湖で快適に過ごせるようになるためには、明治の末と大正の時代をかけての、二十余年間という時間が必要であった。その準備がちょうど完成する時期に、中禅寺湖はクローデルを迎えた。

大正10 (1921) 年11月フランス大使として来日したクローデルは、数ヶ月後の翌大正11 (1922) 年、初夏の日差しもまぶしい5月3日から5日に、生涯二度目の来晃を果たす。

おそらくは上野から汽車で日光駅に降り立ち、そのあと電気軌道で馬返しまで進み、そしてつづら折りの新道を人力車で登ったと考えられる。大正天皇は皇太子時代から中禅寺湖を訪問されているので、新道は賓客を迎えるごとに少しずつ改良されていたが、特にこの年大正11 (1922) 年は前月の4月にイギリス皇太子が来晃しているので、自動車は未だ通れなかったとしてもかなり整備されていたはずである。その坂を登れば、クローデルの眼前には中禅寺湖が広がる。

大正11 (1922) 年となれば、湖畔には外交団の別荘が点在していた。その一つが、大使として逗留する別荘である。24年前、雨中登攀を断念して以来の、望みがかなう。それも、別荘まで用意されているのである。

当時の中禅寺湖畔の外交団別荘とフランス大使館別荘について、次に述べたい。

3. 外国人の別荘

奥日光で外国人が別荘の住人となるのは、前述の通り明治20 (1887) 年イギリス人ウィリアム・カークウッドが最初といわれる。聖地に外国人が住むということで、下野新聞に批判記事が出たほど驚愕された。そもそも中禅寺湖畔の土地は、輪王寺・二荒山神社の所有地か国有地がほとんどであったので、日本人の名を借りて土地を借りたとしても物議を醸すのである。もちろん、条約改正がおこなわれていないので、外国人の不動産取得、すなわち土地所有は不可能であった。

しかし建てて住み始めてしまえば、当時の地図にも掲載されるし、地元で「カーくーどさん」と親しんで呼ばれた。外交団仲間でも噂を呼ぶ。例えば明治27 (1894) 年の8月、ベルギー公使夫人のメアリー・ダヌタンは、3時間半かけて山道を人力車で登ってこの別荘を訪ね、感激し絶賛する。「似かよった点が多い〔イタリアの〕コモ湖の風景が私の心の中に浮かんできた」と日記で述べる。^{#7)}なおこの別荘は、のちに空き別荘となったので、大正12 (1923) 年、大黒屋旅館 (現在はホテル湖上苑) が開業する。現在同ホテルが、真に湖の上に張り出す部屋を提供すると宣伝しているので、カークウッド別荘の立地の良さとダヌタン夫人の感激が理解される。

カークウッドに続くのは、日光紹介者として縁の深いアーネスト・サトウである。公使として再来日したサトウは、明治29 (1896) 年、地

元の旅館兼運送業を営む伊藤浅次郎から湖畔の別宅を借り受けた。

ここはほどなく「南四番」別荘と呼ばれた。この番号は、中禅寺湖の水の華厳の滝への流路口、大尻（おおじり）を起点に、南側と西側に、外国人の別荘の一軒ごとに順に付けたものだが、明治33（1890）年から地元の地図に掲載される。明治38（1895）年には郵便局が集配を始め、交番も常駐することから、増えていく別荘を管理するためにも、番号が必要になったと思われる。南は砥沢（とざわ）の方に向けて「南七番」まで、西は菖蒲ヶ浜の方に向けて「西十五番」までであった。「西四番」が、前述のカーウッド別荘である。フランス大使館は地元では俗称「さんばはん」と言われたが、これは、「三番半」の意味で、南の三番別荘と四番別荘の間にあったからである。^{※8)}

サトウはこの「南四番」別荘を明治33（1900）年の離日まで、4年間に31回訪れた。特に湖畔に伸びる庭園を好んだという。サトウは離日の前年、日本の家族、武田家のためにも日光に別

荘を購入した。ちなみに山を愛した子息久吉は日本山岳会を設立し植物博士となった。^{※9)}「南四番」の家は、その後、英国大使館別荘となり増改築を重ねる。今日もなお、大使や館員がよく利用する夏の保養の家である。和洋折衷の造りで、手入れもよく行き届いている。^{※10)}

在日外交団の別荘として続くのは、フランスである。その別荘取得は、明治42（1909）年のことであるが、詳しくは、次章に譲りたい。

フランス大使館別荘と並んで湖畔に臨む別荘として、大尻に近い方が、帝政ロシア大使館別荘で、「南三番」に位置していた。^{※8)}ただし、大正6（1917）年ロシアで革命がおり、その後空き家になる。ロシア大使館は、この外にも旧ソビエト時代から現在まで鎌倉に別荘を所有し、大使館員たちに活用されている。

同じフランス大使館のお隣でも、大尻から遠い方に位置するのが、ベルギー大使館別荘である。大倉財閥の二代目大倉喜七郎が自費で建てた私的別荘を、ベルギー大使館が借り受けたのが始まりである。^{※10)}大倉喜七郎とベルギー大



使館の縁は、次に述べるアングリング・アンド・カンツリー倶楽部を通してのことであり、正式に譲られたのは、昭和3（1928）年である。現在も、湖畔にたたずみ、館員の来見を待つ。

「南四番」のイギリス大使館別荘をさらに南下すると、「南五番」のイタリア大使館別荘である。もっともイギリスとイタリアの別荘の間どころに、イギリス武官の別荘があり、「四番半」と言われた。イタリアは当初あった家を建て直すことにし、在京の著名建築家アントニン・レーモンド（1888-1980）に設計を依頼した。新しい別荘は昭和3（1928）年に完成し、平成9年まで歴代の大使が利用した。レーモンドは、オーストリー生まれ、アメリカを経て、帝国ホテル建設のためライトと共に来日するが、大正8（1919）年ライトから離れ、関東大震災後、東京に建築事務所を設立する。受注は順調で、たとえば、フランス大使クローテルから震災で壊れた大使公邸の設計を、また、大正7（1918）年創立の東京女子大学からは大正13（1924）年杉

並善福寺移転に際してのほとんどの校舎の設計を依頼されている。このように活躍中のレーモンドに、イタリア大使館は、中禅寺の別荘を任せた。つまり、既存の日本人の家を別荘にしつらえ直したのでは満足しなかったわけで、いかに、ここでの別荘生活に思い入れがあったかがわかる。もっともレーモンドは当時田舎家に興味があり、別荘は外壁内壁を杉の皮の網代あみにするなど、日本の自然に溶け込んだ作品となった。イタリアは、戦前中枢軸国であったので、大使一家もよくここを利用し、ヨットやボートに乗る姿が見られたが、時を経て平成の時代になると、利用者がほとんどいなくなり、栃木県に二千万円で売却した。県は一億五千万円をかけて、窓ガラスやランプまで往時通りに復元し、現在、別荘は「イタリア大使館別荘記念公園」として無料で公開され、魅力ある佇まいを訪問者に見せている。^{※11)}（写真1、2を参照）

イタリアの南の「南六番」には、トーマス・ベーテという外国人が住み、「南七番」はドイツ



写真1 イタリア大使館別荘 一階の応接室（平成19年9月11日、筆者撮影。以下の写真すべて同様）



写真2 イタリア大使館別荘 二階の寝室から中禅寺湖を望む。
 (手前に船着き場。先の半島は、中禅寺湖の中でもひとときわ紅葉の美しさで名高い八丁出島)

大使館別荘と言われていたが、戦後はリゾート宿泊施設になった時期があるという。⁸⁾

このようにフランス大使館中禅寺別荘のある「南」には、英、独、伊、露、白(ベルギー)大使館の別荘が、多少の時期の差はあれ、立ち並んでいた。大正末から昭和初めの最盛期には、外交団関係の建物は、「南」と「西」と合わせて40棟を超えた。イギリス大使館武官ピゴットが、その著『断たれたきずな』で述べたとおり、「夏休み一わたくしたちの場合はいつも中禅寺だった一はとくに幸福な思い出の種である。¹²⁾」別荘の外国人男性たちは毎週末、イギリス大使が会長を務める男体山ヨット・クラブ主催のレースを競い、湖畔では日傘や帽子の婦人たちが応援の歓声を上げた。しかしこれは外国人たちに限られたいわば特殊な世界で、日本人には縁の薄い楽しみであった。

しかし昭和に入り、外交団と日本の上流階級

の交流をもたらす次の楽しみが、「西六番」に興った。東京アングリング・アンド・カンツリー倶楽部という、釣りを通じての国際社交場である。これは、アイルランド出身の実業家と日本人の女性との間に生まれたイギリス国籍のハンズ・ハンターが、大正13(1924)年「西六番」を、グラバーの息子倉場富三郎を介して購入したことにより実現した。幕末長崎で活躍したグラバーは明治期東京で三菱財閥の仕事をしてしたが、故郷スコットランドにも似た中禅寺湖で釣りが出来ると知り、早くからこの地を訪れた。そしてカークウッドやサトウに相前後して、明治26(1893)年に、地元で大崎と言われる湖畔に別荘を持った。彼の死後リンガー商会に譲られていたその「西六番」を、ハンターが引き受け、昭和2(1927)年旧グラバー別荘を解体し、簡素な中にも気品のある建坪二百数十坪の英国風クラブハウスを新築した。クラブの名簿には、

名誉賛助会員に皇族の秩父宮、朝香宮、東久邇宮をいただき、会長に侯爵鍋島直映、副会長に男爵岩崎小弥太、名誉会員に昭和皇后の次兄侯爵久邇邦久、ドイツ・英国・ベルギーの大使たちを迎えた。普通会员にはベルギーに別荘を提供した大倉喜七郎、馬術の「バロン西」で知られる西竹一、元駐米大使の植原正直らがいる。文字通り、内外の紳士たちが集う国際社交場となった。昭和4（1929）年5月には、英国王子グロスター公が金谷ホテルに宿泊した後中禅寺に遊んだが、「西六番」のクラブハウスのメンバーはグロスター公に昼食を饗応する榮譽に浴した。しかしその後、大恐慌やナチスの台頭などが外交団の世界にも影を落とし、昭和15（1940）年8月17日に、パーティの後の漏電による火災が起こり、この象徴的な事件と共に、この「西六番」は消失する。現在は暖炉の煙突部分が、かつての面影を残すかのように立っているのみである。^{註13)}

以上が、明治末から昭和の初めにかけての、湖畔の「南七番」までの外交団別荘と「西六番」の様相である。次にクローデルの訪れることになる「南三番半」について述べたい。

4. フランス大使館中禅寺別荘の由来

明治期の駐日フランス外交官は、三年に一度しか帰国できなかった。(ちなみにクローデル自身も、在京三年で、一年の母国帰還休暇を実行した。)そこで、皇室や他の在京外国人の動きをみて、フランスは明治39（1906）年、湖畔の土地、約4600平方メートルを輪王寺から借りることにした。^{註14)}

その土地の南、湖畔に沿った道を徒歩で10分ほどのところにサトウの別荘があり、明治33（1900）年の離日後は英国大使館別荘となり、「南四番」と呼ばれていたから、先駆者イギリスには数年の遅れをとったが、中禅寺が外交団に注

目され始めたころに、フランスはいち早く当地に到着したとあってよい。ことに、湖畔に通年営業の電信所、郵便局、駐在所がすべて整うのが、明治38（1905）年であるから、その翌年に借り受けたというのは、誠に妥当な選択である。交通の便でいえば、つづら折りの新道が出来て、人力車は通れるようになっていた。馬返しまでの電気軌道も、七年先には開通する。

この土地には、日本家屋の二階建ての別荘が建っていた。青木周蔵（1844-1914）により建てられたといわれている。^{註14)}

青木周蔵は外務大臣を二度歴任した長州出身の外交官である。明治22（1889）年45歳の時、山縣有朋内閣の外務大臣を務め、条約改正交渉を駐日英公使レーザーと開始した。再び山縣内閣の外務大臣となった時には、自らが手掛けた条約改正の施行を、明治32（1899）年に経験した。このような職務にいれば、青木が日光中禅寺に別荘を所有することは、当然である。いつ建築したかは明らかではないが、明治13（1880）年から18（1885）年冬までと、明治24（1891）年から明治30（1897）年までは、在独・在英の公使として在外勤務であり、また次に述べるように、明治20（1887）年前後は那須に土地を買い別荘を建てている。ゆえに、つづら折りの新道開通なども勘案すると、帰国後の明治30年代の初めに別荘を建てたと思われる。

ヨーロッパ帰りの青木が東京の暑さに閉口して避暑地を求めるのは自然であるし、田母沢御用邸も創設されるなど、内外の貴賓から評判を聞いたであろう。明治30年代は、交通の便もつづら折りの坂道が整い、中禅寺湖畔ではレーキサイトホテルが評判を呼び、サトウの別荘が英国大使館別荘になった時期でもある。国際結婚をしたエリザベート夫人や一人娘花子、ハンナとの中禅寺での避暑が想像される。明治12（1879）年生まれのハンナは年頃である。

ちなみに前述のイギリス大使館武官ピゴットは、明治政府の法律顧問を務めた父に伴われて幼少時に3年間東京に暮した。明治37年(1904)年、青年将校として再来日した折、幼な友達のハンナと再会する。そしてドイツ公使館書記官ハッツヘルト伯爵とハンナとの結婚式では案内役を務めたほど、青木家と親しかった。そんなピゴットは、「外交団の連中が絶えず出入りしていた」上二番町の青木本邸を訪れただけでなく、毎年夏には「中禅寺では青木邸に泊まった」と言う。^{#12)}

この別荘を、明治42(1909)年、フランスは購入した。^{#14)}

では、なぜ青木はこの別荘を手放したのであろうか。輪王寺が土地を貸し出した時に青木が家を貸し始めたとするれば、青木の別荘利用は十年に満たないことになる。

青木は在外公使大使21年間のうち、ドイツ滞在は19年を数え、明治元年からの留学も含めると23年に及ぶ。明治時代随一のドイツ通で、貴族出身のエリザベート(兄は、上院議員の男爵)と国際結婚をする。先ほど述べたように、娘ハンナは駐日ドイツ外交官の伯爵と、桂太郎の媒酌で結婚する。こうしたドイツ派の青木は、明治14(1881)年、那須の原野577町歩(約5.7平方km)を開拓の目的で国から借り受け、ドイツユンカー(地主貴族)を目指した。明治21(1888)年までには総計1580町歩(約15.7平方km)に広げ、同年竣工の別荘は明治42年(1909)年に大改築により227坪の邸宅に整えられた。ちなみにこの別荘は現在、栃木県から「青木周蔵那須別邸」として公開されている。青木は、この地に、林業中心の「青木農場」を開設し、私立青木学校も創設する。

ところで日光中禅寺と那須は、同じ栃木県で、それほど距離的には離れていない。しかしその趣はかなり異なる。すなわち、一言でいえば日

光は山であり、ことに中禅寺は湖を山が囲む風景である。一方の那須は、特に彼が開墾した野はのちに「那須野が原」と呼ばれるように、野である。そして青木の関心は湖のマス釣りやボート遊びではなく、原野の青木流開墾であったと考えられる。山縣、乃木、松方ら明治の元勳たちが那須の土地を次々入手し始めているし、まして、「独逸翁」を自負する青木は、妻とともにユンカー生活を公務の合間に実現させたかった。ゆえに、関心は次第に中禅寺湖を離れ、那須野が原へ向かったと思われる。折しも明治42(1909)年は、青木の那須別邸増築完成とフランス大使館の中禅寺別荘取得が重なる年である。青木が大正3(1914)年に肺炎で病没する五年前、クローデル再来日の十二年前のことであった。^{#15)}

中禅寺別荘の取得金額は12900フラン、約7千円である。^{#14)}

明治38(1905)年の末に公使館から大使館に格上げされた在京のフランス代表は、飯田町の最初の公館が手狭になり、「極東の大国と日本を見做していることを同国に示す」^{#14)}ためにも、その後数年間、本国に何度も、大使館の新しい借地への移転と建設計画を示した。しかし、なかなか許可が下りない。たとえば大正2(1913)年のマルセル設計による4,225,000フランの案は、予算上の制約から上院に却下された。当時アメリカの在京大使館建設費は800万フランと言われたから、420万フランは極めて妥当であるという見解もあったが、本国はヨーロッパ式建築の資材入手が日本では困難であることを理解せず、計画は難航した。したがって明治42(1909)年の中禅寺別荘購入は、状況としては、本邸を探している時に別邸を買い求めた、と捉えることができる。ちなみに本邸は、大正12(1923)年の関東大震災で崩壊したので、クローデル大使とレーモンドにより、仮の家として建てられ、

その後ようやく昭和7（1932）年、現在の麻布台の地に、レーモンド設計、清水建設受注で完成された。500万フラン、40万円であったという。本邸が落ち着くのに先立って途中で購入された中禅寺別荘は、簡素とはいえ、価値のある買い物であったと言えよう。

青木が建て、フランスが譲り受けたこの二階建ての木造家屋は、早速大使はじめ館員に愛された。五年後の大正3（1914）年、エミール・レニョー大使の任期中、その九人家族が快適に滞在できるように三部屋増築された。本邸のためのマルセル設計案が本国で前年に却下されたから、せめて別邸は整えたいと思ったのではないかと想像したくなるようなタイミングである。ここで増築された別荘を、クローデルは大正11（1922）年から訪れる。

そして建物のその後について辿ってみると、昭和34（1957）年に清水建設が再び大規模な改修工事を行った。これは、東京のフランス大使館の新築工事と同時期に行われたもので、本邸

の建て直しと別邸の手入れという、誠に妥当な改善である。実際、現在の中禅寺別荘に同うと、二階への階段下の小ホールの壁に、レリーフがあり、次のようにフランス語で書かれている。

Cette villa où écrivit Paul Claudel (1921-1926) fut restaurée en 1957 par Armand Berard étant Ambassadeur.

（ポール・クローデルが1921年から1926年に執筆したこの別荘は、1957年、大使であったアルマン・ベラルによって、改築された。）

そして現在も、駐日フランス大使、また大使館員により利用されている。春から秋までの利用に限られているが、年に200名前後が滞在しているとのことである。

5 クローデルと中禅寺別荘

中禅寺湖バスターミナルから湖に向かい、華厳の滝への注ぎ込み口である大尻から南に湖畔



写真3 フランス大使館別荘 湖畔側（写真左下方はすぐ湖である）



写真4 レーキ水（いまでも取水できる）



写真5 別荘の広縁への上り口の、たたき。(写真右手には湖に降りる石の階段がある)



写真6 フランス大使館別荘一階の広縁
(透かし飾りのランプが、クローデル滞在時と同じく、今も吊り下がっている)

沿いに歩いて、約20分、道路の右手、道と湖畔の間に、フランス大使館中禅寺別荘がある。(写真3参照)

建物から湖畔まで何本かの木があるが、下って行けばすぐ湖に接する。かつては専用の船着き場もあった。また、水道の引かれていないころは、この湖の水を、天秤棒を担いで運び上げていた。ちなみに飲料水は、山からの湧き水が出ているところがあり、各国の大使館別荘のスタッフが、瓶を持って取水しに行った。今も湧水は管を通して流れ、当時のまま「レーキ水」と呼ばれている。lakeをレーキというのは、レーキサイトホテルと同じで明治時代の言葉をつたえて興味深い。(写真4参照)

建物は、湖に向かって和室を一行に並べ、座



写真7 フランス大使館別荘 一階の居間 奥に応接室、右手に広縁

敷に沿って広い縁側の廊下がある。長い廊下すべてが掃き出しのガラス戸を立て、そのガラスを通して湖を見下ろす。まさに、湖に向かって、両手を広げるように佇む。一階の湖畔側には和室を利用して、応接室・居間・食堂が並ぶ。広縁はかなり幅があり、落ち着いた一人掛けの椅子と丸テーブルが置かれている。天井からは、透かしの飾りのある大きな電灯が下がる。クローデル大使が、ランプの吊り下がる広縁に腰掛け、たたきのところで靴のひもを締め、散歩に出発しようとしている写真が残されているが、まるで、先ほどまで大使がいたような錯覚を覚える。もっともクローデルの滞在した1920年代の初めは、まだ電気がなくランプを使っていた。レーモンド設計による昭和3(1928)年新



写真8 フランス大使館別荘 階段（二階から踊り場を見下ろす）

築のイタリア大使館別荘ですら、ランプであった。（写真5、6、7参照）

この透かしランプの下、広い縁側から見える景色は、一面の中禅寺湖と、かすかに霞む対岸と、天気の良い日には男体山である。筆者が訪れたのは霧と秋雨の日で、湿潤な空気と中禅寺湖の水が雨空と一体になっているようであった。天気の良い日は青い湖面が広がるが、いずれにしても水の印象が誠に強い。雨戸がないので、ガラス戸一枚の先に湖が迫る。風雨の激しい台風時、あるいは冬の厳しい寒さの折には、水と冷気に直に接する木造日本家屋である。

湖面と反対側は、道路、そして道路沿いの店の向こうには山がせまる。クロードルは、夏に

森の側の窓を開くと、小さな虫が燈火にたくさん集まることを、エッセイに記している。今でこそ歌が浜の駐車場に近いので店が並んでいるが、当時は全くの森であり、虫も多く飛び交っていたであろう。

両手を広げる建物の中央部分に、二階への階段がある。踊り場付きで二度、方向を変え、二階へ通じる。家の真ん中にこのような大ぶりの階段があるのは、いかにも外国人向けの仕様である。（写真8参照）

二階は宿泊者のための寝室が用意されている。一階と同じく、湖畔に向けて部屋が並び、窓側には一階ほどではないが広めの縁側が伸びる。窓越しには中禅寺湖が広く視界に広がる。眺望



写真9 フランス大使館別荘 二階 森側の窓（執筆したのはこのような位置か）



写真10 フランス大使館別荘 一階 奥の応接室 テーブルの上にフランス国旗

というよりも、湖の中に引き込まれそうな、それほどの近さであり水の広がりである。寝る前には闇の湖面を見、目覚めると朝霧立ちこめる湖面、あるいは朝日に輝く湖面を見る。そのよ

うな印象である。次に、主寝室につながり森側に窓のある部屋に行く。夏の虫が燈火に集まるのを見つめながら、ここでクロードルは執筆をしたのではないかと想像された。（写真9参照）



写真11 フランス大使館別荘 一階 食堂の壁面に飾られる、クロードルの肖像画（中央）と家族との湖畔での写真（左）

階下に再び下りる。奥の間のテーブルにはフランスの国旗がかざられ、何よりも印象的なのは、応接室や居間の壁に、クロードル大使の複数の写真や肖像画が、額に入って飾られていることである。歴代の大使のものは一切なく、クロードルのものだけである。また、先ほども触れたように、階段下のホールにある改築のレリーフ板には、「ポール・クロードルが執筆した別荘」と記されている。中禅寺別荘におけるクロードルの芸術家としての活動を、一番実感し、誇りに思っているのは、現在のフランス大使館員たちではないかと思われた。(写真10,11参照)

では次にクロードルの実際の滞在がいつであったかを、明らかにしたい。

6 クロードルの別荘滞在～Cahier から～

クロードル自身の書き残したものとして、『ノート』Cahier があり、日記に代わる資料とみなされている。プレイヤード版も『日記』として

いる。その『ノート』第5冊から第6冊に、日本滞在中のメモやコメントがある。

大正11 (1922) 年5月3日から5日にかけて、初めて別荘に滞在し、湖畔を散歩する。雪に覆われた山と森に感動し、「地蔵がまぶしくて目を閉じる」と記す。^{※16)}

同年夏、7月の数日と8月中旬から9月13日まで、約一カ月を別荘で過ごす。8月13日には、男体山登山をするが、頂上は霧で視界が遮られていた。湯元の方に降り、急流沿いに帰還する。8月22日には、台風が一晩中吹き荒れた。8月27日に講演を行い、それは後に「日本人の心を訪れる目」“Un Regard sur l'âme japonaise”としてまとめられる。この講演では、8月15日に二荒山神社の儀式を受けた体験を語っている。9月1日には足尾まで遠出の散策をする。家族は大使より1週間遅れて、9月20日に帰京する。^{※17)}

同年10月17日から20日まで、中禪寺湖の紅葉を楽しむ。「燃えさかる炎に」驚く。塩原にも、遠出する。^{注18)}

大正12 (1923) 年1月12日から14日まで、冬の「雪と太陽」を満喫する。裏見の滝を訪れ、「女神の胸を氷の鎧が覆う」と見る。「松」と「クリスタルの集合体」と表現する。^{注19)}

同年5月4日 春の奥日光を楽しむ。「森では、赤と白と紫のつつじが、満開」である。^{注20)}

同年7月2日から13日まで、中禪寺に滞在する。雨と霧の日が続き、「水の中の森」という。^{注21)}

8月の「ノート」が2ページ焼失している。避暑に訪れた可能性は高い。尚、9月1日に関東大震災。^{注22)}

同年9月15日、中禪寺に滞在し台風に遭う。翌日、家族は帰京する。^{注23)}

同年10月13日から19日、中禪寺滞在。湯元へも行く。^{注24)}

大正13 (1924) 年 5月16日・17日はフランスからの訪問客案内のため、金谷ホテルに滞在する。別荘には寄らない。^{注25)}

同年の夏は、3回に分けて滞在する。7月19日から7月31日、8月3日から13日、16日から28日に別荘に滞在する。^{注26)}

同年10月26日から28日は、お客が見えたので日光金谷ホテル滞在だが、「秋の森の素晴らしい紅葉」を楽しむ。^{注27)}

来日して3年を経たので、本国への休暇で、大正14 (1925) 年1月23日離日し、3月26日マルセイユ着。この年の12月に東京への帰任が決定し、大正15 (1926) 年1月16日、日本へ出発し、2月27日帰任する。したがって、大正14年は在外なので、一度も来見していない。1年半ぶりの訪問は、5月である。

大正15 (1926) 年5月16日、日光へ向かい、

金谷ホテルに宿泊し、車で中禪寺別荘を見に行く。^{注28)} まさに、前年に金谷の寄付で新道が広くなり、車が通れるまでになったばかりである。

同年6月6日、お客とともに金谷ホテルに滞在するが、中禪寺へ車で向かう。つつじと桜が美しいが、とりわけ「青と黄色のアイリスが群生して、」クローデルを迎えてくれる。この時の印象は後に *Cent Phrases pour Éventails* 『百扇帖』に所収される。^{注29)}

同年夏、結果的には最後の避暑となるので、誠に充実した滞在ぶりである。

まず7月18日中禪寺へ行き、20日には、湯元と湯の湖を雨の中訪れる。7月末一度帰京し再び別荘へ戻る。

8月2日には、白根山登山をし、霧を通して中禪寺湖を見下ろす。

8月中旬、近隣の山を踏破する。すなわち、8月12日には金精峠を越え、伊香保、浅間、軽井沢、草津、前橋経由で15日に帰還する。この時の体験から、散文「後の国」“L'Arrière-pays”が書かれる。

日光の滝について、遠くから眺めた姿と近寄っての爽快感を述べる。

あるいは自室の燈火に集まる小さな虫たちへの思いを寄せている。この思いは散文「小さな使者たち」“Mies”となる。

帰京は9月8日である。^{注30)}

10月24日 錦秋の中禪寺で、紅葉の木々の葉を「太陽の厩舎」に比す。これは、散文「太陽の深淵」“L'Abîme solaire”において、太陽が立ち上り、炎が燃え、眩い光が溢れるイメージにつながる。^{注31)}

12月、駐米大使に任命される。

12月25日大正天皇が崩御する。

昭和2 (1927) 年2月7日のご大喪の後、2月17日、アメリカへの出発となる。

その直前、1月30日31日、「厳寒の、しかし素晴らしい日光」を散歩する。滝も凍り、「ガラス」の滝である。中禅寺に行き、男体山に別れを告げる。「最後のまなざし」で見る。^{#32)}

以上、年代順に彼の日光・中禅寺滞在を追った。

この回数の多さからだけでも、クローデルが中禅寺湖畔の別荘をいか気に入っていたかが想像できるが、その興奮ぶりを示す手紙がある。1922年7月14日付、初めての夏を過ごしている時に、友人の作曲家ダリウス・ミヨーに宛てたものである。

「想像できる限りで最も美しい風景だ。山と森に囲まれた青い湖のほとりで、美しい火山のすそ野に位置している。私はここでは素晴らしい日本式の家に住み、紙の扉を引き立て、だから完全に森と空と自然に溶け込んでしまっている。娘たちは大喜びで、昼間は湖にボートを漕ぎだしたり、自転車に乗ったりしている。あちらこちらに滝があり、神社や寺も訪問しなくては。生活は美しく、パリのことなど忘れてしまい、パリへはあまり早くには戻りたくないくらいだ。」^{#33)}

別荘への愛着と訪問の喜びは、滞日中ずっと続く。まばゆい新緑とつつじに感動する春。避暑と執筆と山岳行の夏。燃え盛る炎に包まれる錦秋。この三つの季節は毎年必ず訪れる。さらに、冬も二度訪れる。現在この大使館別荘が冬の間は閉鎖されていることを思うと、いかに厳しい条件下でクローデルが訪れていたかが推察できる。それほど訪ねたかったのである。

また、関東大震災の直後2週間で別荘を訪れているのも、帰国休暇の後に1年半ぶりで様子を見に来るのも、この別荘への愛着を示すものである。ことに、別れの「最後のまなざし」は、感慨深い。離日が決まり、ご大喪と送別会の出

席で日程が過密であったにも関わらず、酷寒の中禅寺を訪れて別れを告げた。クローデルのこの地への思いの深さがうかがい知れる。

7 クローデルにとっての日光～「別荘」のちの「城館」の意味～

ではここ中禅寺湖畔で彼はどのようにして日を過ごしたのであろうか。この地はどのような意味があったのか、最後に考えたい。

クローデルがここ中禅寺別荘で為したことのうち、最も重要なのはもちろん執筆である。代表作『繻子の靴』の大部分は日本で、そして中禅寺で書かれた。4日構成のこの戯曲の「第3日目」を、関東大震災の際に大使館・大使公邸と共に失った逸話も有名である。散文や『百扇帖』に収められる短詩の多くも、日光中禅寺で書かれた。また、最初の夏に学生たちに向けて話した講演が、のちに「日本人の心を訪れる目」としてまとめられるなど、日仏文化比較評論を書く契機も、この日光は与えてくれた。

次に彼が為したことは、散策である。男体山・白根山への登山をはじめとする山岳行や、湯元等への遠足に、好んで出かけた。「ノート」に記されている通りである。しかし、このような遠出に加えて、毎日の散歩も欠かさない。「ノート」に敢えて書かないのは、食事と同じような日課であるからである。その散歩は、中禅寺湖畔の地蔵尊までであった。友人で訳者でもある山内義雄の言葉によれば、『百扇帖』にうたわれる地蔵は「大使館別荘から菖蒲が浜ぞいに戦場ヶ原へまがる角に立っていた地蔵のことで、クローデルは、毎日の午後の散歩をこのあたりまでと決めていた。」^{#34)} その詩は、「地蔵 石仏」と題し、「地蔵尊 そのお頭の上 小石二つ載せるがいい おそらくは 身じろきできなくおなりだろう」^{#35)} というものである。ちょっとしたいたずら心をこめて石仏への親しみを表している。



写真12 勝善神 石仏（左）と、石碑（右）竜頭の滝近く

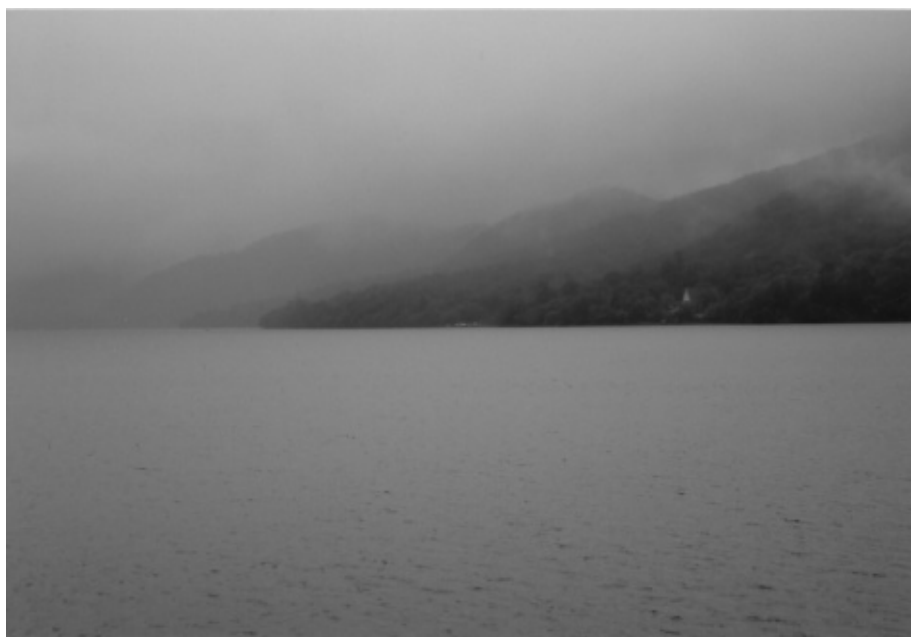


写真13 歌ヶ浜から中禅寺湖を望む。フランス大使館別荘すぐ近くのこの浜辺をクロードルは愛し、自分の写真も撮らせている

筆者は今回中禅寺湖を訪れ、この地蔵が竜頭の滝の近くの「勝善神」であることがわかった。(写真12参照)現在のバス通りになる以前、当時

は表通りだった道に面して、「勝善神」は居していたのである。ゆえに、クロードルがここまで歩いてこの像に会釈して引き返したのである。

別荘からここまではかなりの距離（約5km）があり、かなりの健脚家であるといえる。しかし、東京では、皇居内濠をいつも散策していたクローデルならば、まったく苦ではなく、楽しい「午後の散歩」であったと思われる。

ではなぜクローデルは、山岳行や長い散策をしたのであろうか。それは、自然と接するためである。森と湖、山と水に囲まれること、これが中禅寺で為した第3番目である。（写真13参照）先に引用した手紙にもあるように、「森と空と自然に」溶け込む木造家屋に住み、さらには表に出て、自分の体で「森と空と自然に」接する。そして日本の自然を観察し、日本人の心を知るのである。そして詩人として、『百扇帖』に「森の奥ふかく 老いたる詩人の心のなかをさながらに」あるいは、「われは聴く 水上さして逆まきたぎるこの激流」など多くの短詩を書く。あるいは文明批評家として、多くのエッセイを書き『朝日の中の黒い鳥』という秀逸の日本論へと発展させる。

ところで、このように自然に触れ散歩をしては別荘で執筆をするクローデルは、他の外交官や外国人たちのように、いわゆるパーティ等の社交をしたのであろうか。答えは否である、と思われる。なぜなら、「ノート」にはそのようなことは一切書かれていないし、準備段階の時期ではあるが、ハンス・ハンターの「東京アングリング・アンド・カンツリー倶楽部」へ参加もしていないからである。ちなみに、クローデルの次のフランス大使も、このクラブへは入会していない。ほとんどの駐日外交団が名を連ねる中であって、一線を画しているのは、特筆に値する。昭和初期の英米寄りの幣原外交に対する、フランスの方針の一端が見えるのではないだろうか。いずれにしても、クローデルがこのようになつきあいからは離れていたことを、ここで確認したい。

では、この自然散策と執筆三昧の生活、「美しい生活」は、どのような意味をもったのであろうか？

それは、クローデルという人物にとって、ある安全弁の意味をもったと考える。そもそもクローデルは、詩人であり外交官であるという、多重の人生を送る。それは一つには芸術という狂気にも近いまったく私的な生きざまであり、もう一つには国の代表というあまりにも公の生きざまである。この二つのベクトルを一身に抱えて、53歳の大使として、ここ日本に来た。中国以来の東洋の国への赴任であるが、中国駐在時は30歳前後の若さであり、V夫人との「真昼の時」を過ごす情熱もあった。しかし今回は夫人とともに年頃の娘たちを伴っての大物大使であり、その上、外交官の仕事に於いても、今までの経済商務中心の分野だけでなく、詩人外交官と期待されて文化交流の分野が加わった。それは有難いことではあるが、仕事として割り切るには、自らの私的な領域にも近く、却って心中複雑であったのではないだろうか。期待に対する責任は重い。

そのとき救ってくれたのが、中禅寺別荘である。公の仕事をする場が東京の大使館であり、私的に思索を重ねる場が中禅寺別荘である。もちろん東京においても、昼に外交官をこなし、夜に作家という仕事を「官吏の手堅さ」をもってつづけた。しかし、年に何回か、物理的にも喧噪を離れ、精神的にも自由になる場が必要である。作家としてのクローデルが集中できる場が必要である。ゆえに中禅寺では、社交はしない。「西六番」のアングリング・アンド・カンツリー倶楽部にも、レーキサイトホテルにも興味がない。自然に触れて、思索に没頭する。詩人のベクトルに身を任せたい。したがって夏の避暑のまとまった時間は、誠に貴重である。興味深いことに、熱心なカトリック信者の彼は、中

禪寺で8月15日のマリア昇天祭を迎える。まさに巡礼の昇天祭であり、詩人のベクトルが登りつめる時でもある。

さらに、思索の場としての中禪寺別荘の意味が、のちの人生にも影響を与えたことを指摘したい。つまり、ここ日本で、一身が抱える両方のベクトルを操作するためには、別荘という有難い場所が必要であることを知ったクローデルは、次の任地アメリカ合衆国にわたった直後に、母国で「城館」を購入する。それは、日本を離れた昭和2（1927）年2月からわずか3ヶ月後の5月のことである。ワシントンに3月中旬着任し、4月末に帰国し、5月上旬ローヌ川に近い町ブラングでルイ13世風の城館を入手した。そしてその後の人生で、母国に帰国するたびに、パリは早々に切り上げて城館に赴く。外交官を退官した後は、城館に滞在することが多くなった。思索のためのお気に入りの場所、その嬉しさをかみしめたのが、中禪寺別荘だった。ゆえに、中禪寺から城館へ、その場所を移させたといえる。

おわりに～『百扇帖』より～

ブラングの城館に比べれば、つつましい木造日本家屋である。しかし愛おしく、ここにいれば、板戸一枚で、森と湖に溶け込むことができる。しかも外に出ても、数々の詩想を与えてくれる。『百扇帖』からいくつか拾いながら、ともに散策してみよう。

クローデルは杖を持ち、日光を散策する。湖畔の天気は安定せず、日が射したかと思うと雨になる。「われは織匠 手にする魔法の杖をもて 日の縞と 雨の糸とを織りませる」

散策すれば漆黒の森が迫る。「じっと動かぬ漆黒の木叢のなか たちまち咆哮する真紅のひとり」

男体山は堂々と立つ。「朝ぼらけ 男体は白根

めがけて大き黄金の矢を放つ」

尚、この詩は、男体山と白根山が太古の時代、現在の戦場ヶ原で戦い男体山が勝利したことを祝うという地元の祭事儀式に基づくと考えられる。

溪流と滝の水音にも圧倒される。「つつじを見ざるもの そは 激流のひびきを聞かざるもの」

この詩は、竜頭の滝近辺の見事なつつじを謳うと考えられる。

『百扇帖』にはまだ多くの日光で靈感を得た短詩がある。こうした詩のほかに、この地に滞在したからこそ培われた、彼の日本観と自然観もある。次の機会に考察したい。

このように日光中禪寺は彼に詩想を与え、神と自己と自然との意味を教えてくれた地であるが、別荘がなかったら、それは全く叶わなかった。中禪寺坂の下の、日光市街の金谷ホテルに逗留して、29歳の時のように、東照宮を参拝し、湖畔を目指そうと坂を登っただけであろう。

本論の前半で検討したように、クローデルの二度の滞在の間の二十余年間に、交通や諸設備が整い、在京外国人の関心が日光市街から中禪寺に上ってきたから、そして各国が湖畔に別荘を持つという動きがあったから、そのおかげで、大使クローデルのためにも、別荘が用意されていたのである。その別荘を建てたのが、青木周蔵という不平等条約改正に尽くした外交官であったというのも、縁を感じる。また、東京の大使館新築が思うように運ばなかったからこそ、フランスは別荘入手に動いたともいえるので、誠に何が幸いするか分からない。

まさに湖畔の中禪寺別荘で編まれた、最高傑作とも思える短詩をもって、本論を終えたい。

「水の上に水のひびき 葉のうへにさらに葉

のかけ」

本論を書くにあたり、在日フランス大使館の方々に大変お世話になりました。経済部のジャン-イヴ・バジヨン公使、村手陽子様、施設部の高畑奈美様、別荘の山本俊彰様に心より感謝申し上げます。また、日光市文化財保護審議委員の小島喜美男様にもご教示いただき有難く、厚く御礼申し上げます。

注

- 注1) 井戸桂子「ポール・クローデルの日光一若き詩人への啓示」『駒沢女子大学研究紀要』第13号(2006年12月)43頁—54頁。
- 注2) 外国人訪問者の数については、東照宮来訪者を日本人と外国人別にとった統計があるので、明確に挙げられる。手嶋潤一『日光の風景地計画とその変遷』(随想社、2006年)46頁。
- 注3) 明治30年までの日光地区の発展については、横浜開港資料館編『世界漫遊家たちのニッポン』(横浜開港資料普及会、1996年)、福田和美『日光避暑地物語』(平凡社、1996年)、岡田義治「日光の近代和風建築」『続日光近代学事始』(随想舎、2004年)61頁—79頁を参照。
- 注4) 中禅寺湖畔の宿屋等の情報については、小島喜美男「中禅寺湖畔における宿泊業の盛衰」前掲『続日光近代学事始』97頁—111頁を参照。
- 注5) たとえば明治19(1886)年、在日アメリカ人のフェノロサとビゲローはアメリカの名門出身の思想家ヘンリー・アダムズを日光の輪王寺僧坊から馬に乗せ、中禅寺湖で泳ぎさらに湯元温泉まで行くという小旅行を案内した。井戸桂子「明治十九年、アメリカからの来訪者」『叢書比較文学比較文化II・異文化を生きた人々』(中央公論社、1993年)209頁—246頁。
- 注6) 電気軌道と日光自動車株式会社及び本多静六の意見書については、手嶋潤一、前掲書、49—52頁、69—87頁。
- 注7) エリアノーラ・メアリー・ダヌタン著長岡祥三訳『ベルギー公使夫人の明治日記』(中央公論社、1992年)64、65頁。
- 注8) 小島喜美男「西十二番考」『洛山晃 世界』(随想舎、1998年)5頁、9頁。
- 注9) *The Diaries of Sir Ernest Satow, British Minister in Tokyo (1895-1900)*, Edition Synapse, 2003.
尾田啓一「アーネスト・サトウと武田久吉の日光」前掲『続日光近代学事始』142—156頁。
- 注10) 福田和美、前掲書、196、197頁。
- 注11) レーモンドについては、*The Japan Architect 33*, Antonin Raymond (新建築社、1999)、アントニン・レーモンド著三沢浩訳『自伝アントニン・レーモンド』(鹿島出版会、2007)および注14)のフランス大使館資料による。
イタリア大使館別荘記念公園については、上記の書に加え、同公園の栃木県発行のパンフレット、ホームページおよび管理人のお話による。
- 注12) サー・フランシス・ピゴット 長谷川才次訳『断たれたきずな』(上)(時事通信社、昭和38年)123頁。
青木家との思い出は同書、59頁、61頁。
- 注13) 東京アングリング・エンド・カンツリー倶楽部については、福田和美『日光鱒釣紳士物語』(山と溪谷社、1999年)
- 注14) 駐日フランス大使館施設部の資料、およびフランス大使館編 *Résidences, les «maisons» de la France au Japon : Presque*

150 ans d'histoire による。

注15) 青木周蔵については、坂根義久校注『青木周蔵自伝』(平凡社、1994年)および、那須塩原市ホームページ、道の駅「明治の森・黒磯」旧青木家那須別荘を参照。

注16) Paul Claudel *Journal I* (Gallimard, 1968) (以下、*I* と略す) , p. 547.

尚、*Les Ambassades de France* (Perrin, 2003) 、および、大出敦、中條忍、根岸徹郎編、『日本におけるクローデル』(ポール・クローデル歿後50年記念企画委員会、2005年)も適宜参照した。この貴重な記念カタログを分けて下さいました中條忍先生に、厚く御礼申し上げます。

注17) *I* p. 554, p. 556, p. 559.

注18) *I* p. 561.

注19) *I* p. 571.

注20) *I* p. 597.

注21) *I* p. 603.

注22) *I* p. 605.

注23) *I* p. 606.

注24) *I* p. 608.

注25) *I* p. 630.

注26) *I* pp. 637, 638.

注27) *I* p. 648.

注28) *I* p. 716.

注29) *I* p. 721.

注30) *I* pp. 725—727, 729, 731.

注31) *I* p. 737.

注32) *I* p. 756.

注33) *Cahiers Paul Claudel III*, (Gallimard, 1961) p. 71. 尚、文章は拙訳である。

注34) 山内義雄訳『クローデル詩集』解説(ほるぷ出版、昭和58年) 251頁。

注35) 同上、61頁。

尚、「おわりに」に引用する『百扇帖』所収の短詩は、同書の山内義雄訳である。